身の回りの事象に自ら働きかける子どもの育成

――身近な素材を使った遊びを通して――

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由……1
Ⅱ　生活科の研究　……2
　1.　経緯と背景　……2
　2.　目標及び内容　……4
Ⅲ　身近な素材の研究　……9
　1.　遊びについて　……9
　2.　身近な植物を使った遊び　……10
Ⅳ　生活科年間指導計画（第１学年）……13
　1.　生活科単元構成の視点　……13
　2.　第１学年生活科単元計画（私案）……15
Ⅴ　授業実践　……17
　1.　単元名「あそぶものをつくろう」……17
　2.　単元の目標　……17
　3.　単元について　……17
　4.　単元の構造図　……17
　5.　単元活動計画　……19
　6.　活動計画案　……21
　7.　授業メモ　……22
　8.　結果と反省　……24
Ⅵ　研究の成果と今後の課題　……24
≪主な参考文献≫

浦添市立当山小学校教諭

諸見里　信　子

身の回りの事象に自ら働きかける子どもの育成

―― 身近な素材を使った遊びを通して ――

浦添市立当山小学校教諭　諸見里　信子

1　テーマ設定の理由

「きょう、遊べる！」が合言葉のように子どもたちの間を飛び交い、「きょうは忙しいから遊べない。」、「少しだったら遊べるよ。」という返事がかえってくる。今日の子どもたちは、忙しい生活を送っているようだ。稽古事や塾などにおわれ、子どもの特権ともいうべき遊びの時間を見つけるのは、大変なことのようである。

子どもたちの遊びには、本来、広い意味での学習機能が含まれており、身近にいる年長者や年少者と接することで尊敬・礼儀、そして、いたわりなど、人と人との関わりの楽しさや厳しさ、社会生活を営む上での基礎的・基本的なことを子どもたちに経験させてくれるものである。特に、直接自然と触れ合う遊びは、子どもの情緒・創造性を培う上で重要であり、ひいては自然の不思議さなどを知り、自然を探求する態度を育てる土台となるものである。

近年、子どもたちの遊び方に変化がみられてきた。相手の立場にたって考え、行動し、「共に楽しむ」ということが得られる集団遊びよりも、ファミコンやビデオ、プラモデルなどのように自分一人が楽しければそれで満足してしまうような遊び、しかも、特定の道具を使った遊びが主流を占めつつある。また、遊び場所についても変化がみられ、昭和46年ＮＨＫの「ふだんよく遊ぶところ」という質問に対して「公園・空き地・原っぱ」と答えた子がほとんどを占め、「家の中」はわずか６パーセントにすぎなかったのが、昭和58年のある調査では、「自分や友達の家」と答えた子が圧倒的多数を占めていたという結果が報告されている。

これは、子どもの興味を引き付ける遊びが自然の中から室内の遊具へと変わってきたことや、宅地化にともない森林や原っぱ・空き地などが減少していることも要因の一つではないだろうか。

内へ内へと入っていく活動（遊び）の増加、自然と接する場や機会の減少の中で、子どもたちの自然に対する興味・関心・探究心は本来旺盛であるにもかかわらず、現状においては埋もれつつあるのが実状である。また、物質的に恵まれすぎた環境、自ら意志決定をする場や機会の減少により受身の生活をしている子どもたちが増えていることも見逃せない問題である。

今回の指導要領の改訂にともない平成４年度から小学校低学年においては、新教科として「生活科」が設置されることになった。この「生活科」は、具体的な活動や体験を通し、自分と身近な社会や自然とのかかわりについて関心を持ち、自分自身や自分の生活について考え、生活上必要な習慣や技能を身につけて、自立への基礎を養うことをねらいとして生まれたものであり、「直接体験」や「遊び」を中心に学習が展開されるところに特色がある。

では、子どもを取り巻く条件の中から「生活科」のねらいを達成するにあたってはどの方法が最適なのかを私なりに考えてみると、子どもの体験できる範囲や環境から、身の回りの事象（特に自然）に目を向けさせることではないかと思われる。自然の中で遊びを考え、つくり、そしてのびのび遊ぶことで子ども自身が積極的に自然に働きかけ、より自分の生活と結び付けて考える態度を育てることができのではないだろうか。

そこで、「実際に物を見たり動かしたりして遊ぶ中で、いろいろなことに気づく」という低学年の特性を踏まえて、身近な自然を使って遊ぶことで創造力、観察力、生きるものを大切にするという生命尊重の態度を育てたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　生活科の研究

1. 経緯と背景

平成４年度から低学年においては、理科・社会科を廃止して新教科「生活科」を設置することになる。この「生活科」という新教科がどのような経緯をたどり、そして、どういう背景から生み出されたのかを考えてみたい。

(1)　生活科誕生までの経緯

①　昭和46年６月　中央教育審議会答申

低学年においては、知性・情操・意志及び身体の総合的な訓練により、生活及び学習の基本的な態度・能力を育てることが大切であるから、これまでの教科の区分にとらわれず、児童の発達に即した教育課程の構成のしかたについて再検討する必要がある。

（児童の発達段階に即して、総合的な教育ができるような教育課程の再構成が求められた。）

②　昭和50年10月　教育課程審議会中間まとめ

第１学年においては、この学年段階における社会及び自然に対する観察力や思考力を育てるためには、より広い見地にたって効果的な指導ができるよう、社会科及び理科の内容を中心として、例えば、児童が自分たちをとりまいてい　社会的及び自然的な環境について学習することを共通のねらいとするような目標と内容をもった新しい教科を設けることについても検討してみる必要がある。（新教科設置についての検討の必要性）

③　昭和51年10月　教育課程審議会のまとめ

直ちに教科の編成を変えることには、なお研究と思考の積み重ねが必要であるという考え方が強く、むしろ教科の編成は現行通りとし、合科的な指導を従来以上に推進するような措置をとること。（合科指導の推進）

④　昭和51年12月　教育課程審議会答申

低学年においては、児童の具体的かつ総合的な活動を通して知識・技能の習得や態度・習慣の育成を図ることを一層重視するという観点から合科的な指導を従来以上に推進するような措置をとること。（具体的・総合的な活動を通した知識・技能の習得、態度、習慣の育成重視）

⑤　昭和52年７月　学習指導要領告示

ア　総則……低学年においては、合科的な指導が十分できるようにする。

イ　理科（第３学年指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い）

低学年の指導にあたっては、特に言語・数量・造形などに関する諸活動との関連を図り

ウ　社会科（第３学年指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い）

低学年の指導にあたっては、特に言語・自然・造形などに関する諸活動との関連を図り

（学校において合科指導のための指導計画を作成する）

⑥　昭和58年11月　中央教育審議会教育内容等小委員会審議会報告

低学年においては、国語・算数を中心としながら既存の教科の改廃を含む再構成を行う必要があるが、どのような教科構成が望ましいかについて、今後とも更に検討する必要がある。

⑦　昭和61年4月　臨時教育審議会第2次答申

低学年の教科構成については、読・書・算の基礎の習得を重視するとともに、社会・理科などを中心として教科の総合化を進め、児童の具体的活動・体験を通して総合的に指導することができるように検討する必要がある。（社会・理科を中心とした教科の総合的指導の検討）

⑧　昭和61年7月　小学校低学年の教育に関する調査研究協力者会議

教科を集約し、再構成することが適当であり、また、現行の低学年の社会科及び理科のねらいは、児童の具体的活動や体操に即した指導をする方が一層有効に達成できると考え、これらのことから生活科（仮称）を設定し、その上で、社会科及び理科をその中に統合する。（新教科としての生活科（仮称）の設置や社会科・理科の廃止の検討）

⑨　昭和61年10月　教育課程審議会中間まとめ

低学年の教育全体の充実を図る観点から低学年に新教科として生活科（仮称）を設定し、体験的な学習を通して、総合的な指導を一層増進するのが適当であると考える。なお、社会科及び理科はその中に統合することとする。

（昭和61年7月の研究協力者会議の報告を基に、生活科(仮称)設置が打ち出されてきた。）

⑩　昭和62年12月　教育課程審議会答申

低学年においては、生活や学習の基礎的な能力や態度などの育成を重視し、低学年児童の心身の発達状況に即した学習指導が展開できるようにする観点から新教科として生活科を設定し、社会科及び理科は廃止することにした。（生活科の誕生）

以上のことから、呼称は異なるが、20年近く前から新教科「生活科」のねらいを含んだ教科の設置については、論議されていたことがうかがえる。

(2)　生活科設置の背景

「生活科」が新教科として設置された理由を考えてみると、

①　子どもの発達段階や発達の特性に即した学習活動ができるような教科が必要だということ。

5歳から7歳までの子どもを発達的にみれば、活動を通して体で考える、理解するという共通性がみられる。小学校低学年はこの意味において、具体的な活動を通した学習展開ができる教科が必要である。

②　挨拶などのような基本的習慣が身についてなく、小刀で鉛筆を削るなど生活上必要な技能の習得も不充分な子が増加している。また、子どもの自然離れという実態を考え、その点を補充してやれるような教科が必要である。

③　内容の区別や時間の制約がなく、遊びを中心とした幼稚園教育と、机について教科、道徳、特別活動に分化される小学校教育との間には、あまりに格差がありすぎて子ども自身がとまどってしまうという実状から、幼稚園と小学校の関連を円滑にするめの教科が必要である。

④　物事を客観的に理解させるということや、頭で覚えることに偏りがちな低学年理科、社会

科からの反省にたって、生活と密接なかかわりにおいて学習ができるような教科が必要である。

このような4つの点があげられる。

学習が頭の中だけの知識として終わるのではなく、生活に即し、身体全体でしかも確かな知識として獲得できる子、たくましく生きていける子の育成をはかるための一つの手段として生まれてきたものが「生活科」といえよう。

2. 目標及び内容

(1) 目　標

平成4年度から実施される生活科は、総括目標に次のことを掲げている。

> 具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

生活科のねらいは、4つのポイントに分けてみることができる。

① 具体的な活動や体験の重視

身体で考えるという低学年児童の発達段階から考えて、適合した学習活動ができるようにするには、具体的な活動や体験を通すことが大切であり、それも、「疑似体験」ではなく「直接体験」をさせることが重要である。

具体的な活動や体験とは、見る・調べる・探す・作る・育てる・遊ぶなどの活動や体験、それを言葉や絵・動作・劇化などで表現する活動をさしている。

② 自分とのかかわりで社会や自然をとらえる。

自然の学習や社会の学習では、自然の事物・現象の一般性などを理解させるということではなく、そこに見られる事実をとらえ、自分とのかかわりを考えられるようにすることに力点がおかれる。

生活科の学習全てが自分自身とのかかわりにおいて進められ、自分自身の成長を見つめたり、自分の特性や能力に気付かせることが重要である。

③ 生活上必要な習慣や技能を身に付ける。

生活上必要な習慣とは、一般的にいわれている基本的生活習慣を意味するものととらえ、生命尊重や健康・安全に関すること、礼儀作法に関することなど社会生活に必要な条件を満たすものがある。

生活上必要な技能とは、生活習慣に密接に関わり、その習慣のうち手や身体などを通して操作を必要とするもので、自分の体を清潔にするためや食事に関わって働く手の技能、物を扱うときに必要な技能、生活に必要な用具をしっかり扱う技能などがあげられる。

④ 自立への基礎を養う。

これは、生活科の究極的な目標ともいえ、自分の生活（学習や遊びも含めて）との関わりにおいて社会や自然をとらえ、自らが関わりを深め、学校や家庭、地域での積極的な生活

（学習）態度を身に付けていくことである。

低学年でいう自立の基礎とは、集団の中できちんと生活できることや、自分の考えや思いを皆の前で表出し、他の人のことも聞けることなどがあげられる。

生活科では、健康・安全について、対人関係・社会・自然環境との関わり方、製作、表現を通して自立の基礎を養うことになるであろう。

総括目標の次に具体目標３点があげられ、実際の活動や体験を通して、①社会性の育成、②自然愛の育成、③表現力の育成を図ろうという趣旨が示されている。

① 自分と学校、家庭、近所などの人々及び公共物とのかかわりに関心をもち、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動することができるようにする。

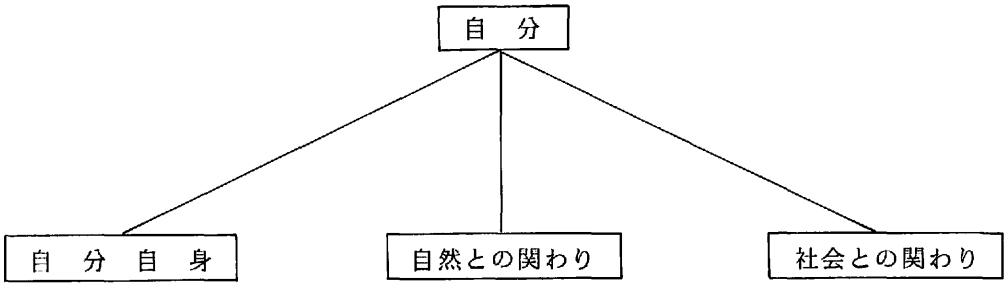
② 自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。

③ 身近な社会や自然を観察したり、動植物を育てたり、遊びや生活に使うものを作ったりなどして活動の楽しさを味わい、それを言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする。

この具体目標は、１学年から２学年までの２年間を通した指導のねらいといえよう。

(2) 内　容

生活科の内容は、目標とのかかわりから子どもの実態に即したものやめざす子どもの姿に対応したもの、具体的な活動や体験に基づく学習が可能なものが求められる。そこで、内容選択の基本的視点として３項目、具体的視点として10項目があげられており、その関係については次頁の通りである。



①健康や安全に気をつけて遊びや生活ができるようにする　（健康で安全な生活）

②家族や友だち、先生などと適切に接することができるようにする　（身近な人々との接し方）

③公園や乗物などの公共物を大切に利用できるようにする　（公共物の利用）

④生活に使うものを大切にし、計画的に買物ができるようにする　（生活と消費）

⑤日常生活に必要なことを、手紙や電話などによって伝えることができるようにする　（情報の伝達）

⑥野外の自然を観察したり、動植物を飼ったり、育てたりするなどして、自然との触れ合いを深めることができるようにする　（身近な自然との触れ合い）

⑦季節の移り変わりによって、生活が変わることに気付くことができるようにする　（季節の変化と生活とのかかわり）

⑧遊びや生活などに使うものを作り、楽しく遊ぶことができるようにする　（物の製作）

⑨自分でできるようになったことや生活での自分の役割が増えたことなどに気付き、自分の成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持つことができるようにする　（自分の成長）

⑩日常生活に必要な習慣や技能を身に付けるようにする　（基本的な生活習慣や生活技能）

基本的な視点や具体的な視点は、各々が独立しているものではなく、複数と結びつくものであり、特に、⑩基本的な生活習慣や生活技能は、全項目とかかわりを持つものである。

次に、各学年の学習内容を示すことにした。

≪第１学年の学習内容≫

(1) 学校の施設の様子及び先生など学校生活を支えている人々や友達のことが分かり、学校において楽しく遊びや生活ができるようにするとともに、通学路の様子などについて調べ、安全な登下校ができるようにする。

{ ①健康で安全な生活、②身近な人々との接し方、③公共物の利用 }

- 学校や近所などで安全に遊びや生活ができる。 • 通学路などにおいて、安全な歩行ができる。
- 家族や友達、学校の先生などと自分とのかかわりについて考え、挨拶をしたり、話を聞いたりすることができる。
- 近所の公園や学校などの施設設備などを大切に使って遊ぶことができる。

(2) 家庭生活を支えている家族の仕事や家族の一員として自分でしなければならないことが分かり、自分の役割を積極的に果たすとともに、健康に気を付けて生活することができるようにする。 { ①健康で安全な生活②身近な人々との接し方④生活と消費⑤情報の伝達 }

- 自分の体に関心をもち、健康に気をつけて生活ができる。
- 家族や友達、学校の先生などと自分とのかかわりについて考え、挨拶をしたり、話をしたり、話を聞いたりすることができる。
- 生活に使うものを整理整頓し、それを大切にすることができる。
- 自分が考えていることを身近な人々に伝えたり、人が伝えてくれることを受け止めたりすることができる。 • 家庭や学校生活に必要なことなどを人に伝えることができる。

(3) 近所の公園などの公共施設はみんなのものであることが分かり、それを大切に利用することができるようにするとともに、身近な自然を観察し、季節の変化に気付き、それに合わせて生活することができるようにする。{ ③公共物の利用⑦季節の変化と生活とのかかわり }

- 近所の公園や学校などの施設設備などを大切に使って遊ぶことができる。
- 季節（四季）の変化に関心をもち、自然の様子が変わることなどに気づくことができる。
- 季節や天候によって、生活の様子が変わることなどに気づくことができる。

(4) 土、砂などで遊んだり、草花や木の実など身近にあるもので遊びに使うものを作ったりして、みんなで遊びを工夫することができるようにする。

{ ⑥身近な自然との触れ合い、⑧物の製作 }

- 花や木の実、土、砂などで遊ぶことができる。
- 遊びや生活に使うものなどを作り、みんなで遊びなどを工夫したりすることができる。

(5) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらも自分たちと同じように生命を持っていることに気づき、生き物への親しみをもち、それを大切にすることができるようにする。

{ ⑥身近な自然との触れ合い }

- 動物や植物を飼ったり育てたりして、生き物を大切にすることができる。

(6) 入学してから、自分でできるようになったことや日常生活での自分の役割が増えたことなどが分かり、意欲的に生活することができるようにする。 { ⑨自分の成長 }

- 自分でできるようになったことや、自分の役割が増えたり友達が増えたりしたことに気づき、意欲的をもって生活することができる。

≪第２学年の学習内容≫

(1) 自分たちの生活は、近所の人や店の人など多くの人々とかかわっていることが分かり、日常生活に必要な買物や使いをしたり、手紙や電話などで必要なことを伝えたりするとともに、人々と適切に対応することができるようにする。

{ ②身近な人々との接し方　④生活と消費　⑤情報の伝達 }

- 近所の人や店の人と適切な接し方ができる。
- 家に来る人たちとの応対ができる。
- 必要なものを自分で計画的に買うことや、買物や使いができる。
- 伝えたいことを手紙に書いたり、必要なことを電話で話したりすることができる。

(2) 乗り物や駅などの公共物のはたらきや、そこで働いている人々の様子が分かり、安全に気を付けて、みんなで正しく利用することができるようにする。

{ ①健康で安全な生活　③公共物の利用 }

- 学校や近所などで安全に遊びや生活ができる。
- 乗り物や駅などのはたらきや利用の仕方が分かり、みんなで気持ちよく利用できる。

(3) 季節や地域の行事にかかわる活動を行い、四季の変化や地域の生活に関心をもち、また、季節や天候などによって生活の様子が変わることに気付き、自分たちの生活を工夫したり、楽しくしたりすることができるようにする。　{ ⑦季節の変化と生活とのかかわり }

- 季節（四季）の変化に関心をもち、自然の様子が変わることに気付くことができる。
- 季節や天候によって、生活の様子が変わることなどに気付くことができる。
- 季節にちなんだ行事などを調べ、みんなでそれを行うことができる。

(4) 身の回りにある自然の材料などを用いて遊びや生活に使うものを作り、みんなで遊びなどを工夫することができるようにする。　{ ⑧物の製作 }

- 遊びや生活に使うものなどを作り、みんなで遊びなどを工夫したりすることができる。
- 季節や文化にちなむ行事のために必要なものを作って楽しみ、自分とのかかわりに気付くことができる。

(5) 野外の自然を観察したり、動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの変化や成長の様子に関心を持ち、また、それらは自分たちと同じように成長していることに気付き、自然や生き物への親しみをもち、それらを大切にすることができるようにする。

{ ⑥身近な自然との触れ合い }

- 動物や植物を飼ったり育てたりして、生き物を大切にすることができる。
- 野外の自然を観察し、動植物の変化の様子などに気付くことができる。

(6) 生まれてからの自分の生活や成長には多くの人々の支えがあったことが分かり、それらの人々に感謝の気持ちをもち、意欲的に生活することができるようにする。{ ⑨自分の成長 }

- 自分の成長には多くの人々の支えがあったことに気付き、それらの人々に感謝の気持ちをもつことができる。

Ⅲ　身近な素材の研究

1. 遊びについて

(1)　遊びの意義

子どもは、遊びという世界において、自律性や独立性を培うとともに、仲間集団の中で自分の長所や特性を発揮し、一方で、自分の欠点や短所を自覚しながら心身ともに両面の発達を促していくといわれている。

遊びを勉強と摘対関係にとらえがちな現代の風潮の中で、教育的見地から遊びのもっている意義を再認識し、次のような遊びの教育的価値を理解すべきであろう。

①　身体的能力の発達

外遊びの積み重ねによって、巧ち性や平衡感覚、持久力、瞬発力などの身体的な能力を培っていく。

②　知的能力の発達

自発的で自由、規制されたりその結果が評価されたりしない中で子どもは、創造力を働かせ、挑戦し、奇抜な発想をする。想像性、知的柔軟性を発達させる。

③　情操のかん養

自然や自然物と接する中で、それらへの情感を豊かにする。

④　社会性の発達

集団遊びを通して仲間との協調性や思いやり、自己制御や奉仕、自己犠牲など、人間関係のもち方を学んでいく。ルールづくり、ルールのある遊びを通してルールの意義を理解し、尊重する態度を培っていく。

⑤　その他

友達と接する時間が延長されたり、行動半径が広がったりして、自立の基礎が培われること、束縛や緊張から解放され、欲求不満のはけ口となったりして、情操の安定に役立つ。

生活科の学習展開においては、上記の教育的価値を充分把握した上で、遊びを効果的に取り入れるようにすることが大切である。

(2)　草花遊び

草花遊びとは、植物の葉・茎・花・実などを使ってなにかをつくったり、ゲームを楽しんだりする活動のことを意味している。これは、子どもが植物を材料として、知恵をはたらかせ、自ら創り出してきたもので、子どもたちの優れた文化遺産ともいえるものである。

生活科で行われる草花遊びは、次のような意義をもった活動である。

①　探求的態度を養う

草花遊びの場を提供することによって子どもは、自らの好奇心で自然を探求する態度を培っていく。

②　各植物の形状を理解し、識別の目と判断力をつける。

種々雑多な植物の中から、材料にする植物がもっている独特の性質や形状を見分け、目指す部分を間違いなく探し出す、確かな目とすばやい判断力を養う。

③　手先を器用にする

折る、裂く、切る、組み合わせる、組み立てるなど手先を使う活動を伴うため、手先の器用さが養われる。

④　造形的表現力を身につける

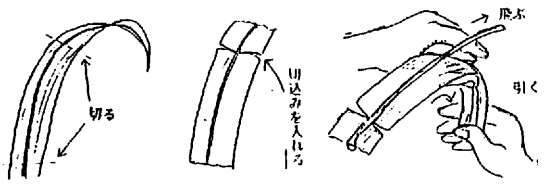
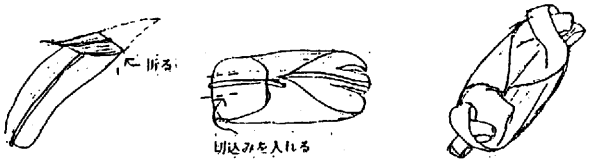
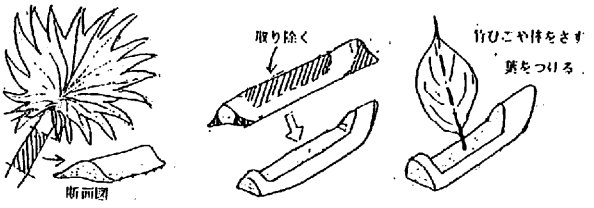
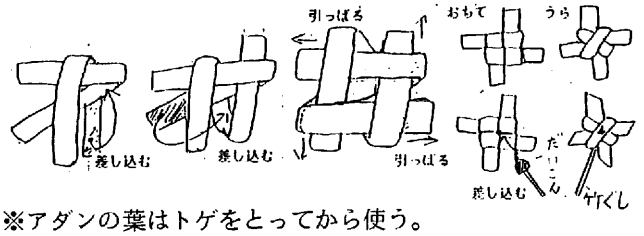
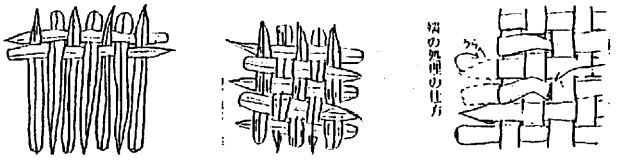
各植物の形状の特性を生かしながら創造し、造形的な表現活動を楽しみながら表現力を豊かにしていく。

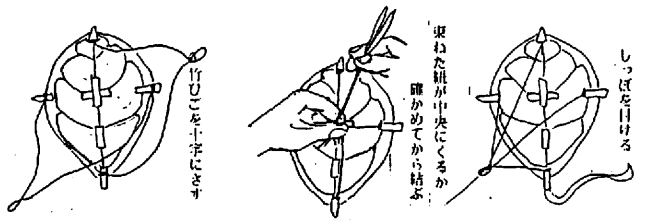
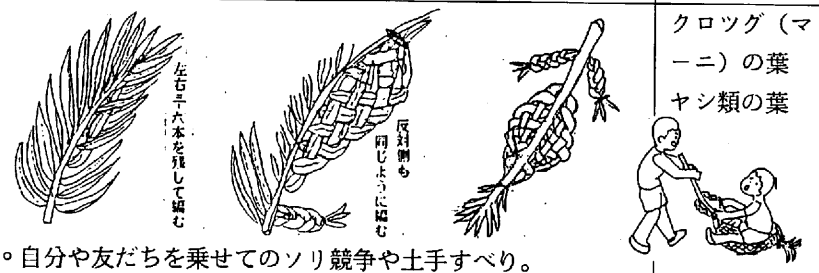
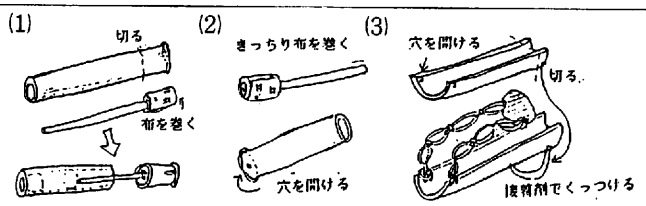
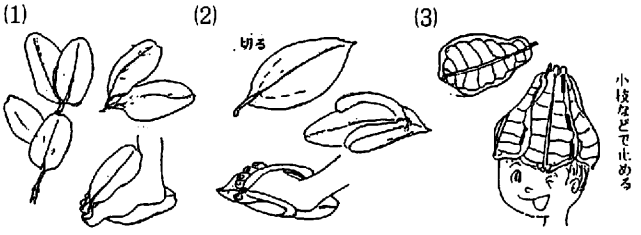
2. 身近な植物を使った遊び

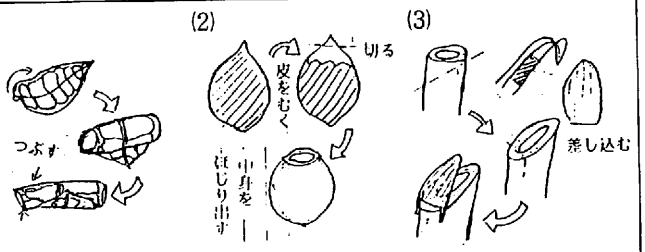
子どもたちを自然の中に出してのびのびと活動をさせる（遊ばせる）には、まず、教師自身が身近な素材を使った活動を身につけておく必要がある。

そこで今回は、身近な植物を使った遊びを中心に研究をおこなってきた。ほんの数例を紹介したいと思う。（特にそれらの中に□教育的価置、△草化遊びの意義が顕著だと思われるものに印付けをした。）

遊び名	作り方及び遊び方	材料名	場所
①すもう △4	(1) そろえて切る　葉っぱや紙を差し込む　(2) 切る　(2) 差し込む ◦穴を開けるときは、ソテツの葉を使うと開けやすい。 ◦まわりをたたいた時の振動により力士が動く。	•(1)はマツの葉 •(2)はオヒシバ（チカラグサ）の穂 •(3)はマツの葉の他にガジュマルやカキの葉等を使う。	◦マツ •正門の付近 •「自然に学ぶ」付近 ◦オヒシバ（チカラグサ） •運動場周辺をはじめとして校内のどこでも見うけられる。
②つなひき	(1) 引っぱる　(2)　(3) 引く　皮のみを切る　折って皮をはがす ◦お互いにからませて引っぱり合う。	•マツの葉 •オオバコ（フィラファグサ）の穂 •ムラサキカタバミ（ヤファタ）の葉・花	◦オオバコ・ムラサキカタバミは、校内のいたる所で見つけられる。
③うま △2	(1)　(2) 葉っぱを切る ◦かるくたたいて進める。◦相手の馬にからませて持ち上げる。	(1) •エノコログサ（ムシグァー）•ナピアグラスの穂 (2) •デイゴの葉	◦エノコログサは運動場や裏門の道路沿いなど ◦デイゴは運動場周辺

遊び名	作り方及び遊び方	材料名	場所
④ 飛行機 △3		・インドゴムノキ、モモタマナ、ツバキの葉など	◦インドゴムノキモモタマナは、運動場周辺 ◦ツバキは池のそば
⑤ 草矢 △2	 ◦右手を下に引くと草矢が前へ飛び出す　※左手は固定しておく	ススキの葉 サトウキビの葉 （葉が縦に裂け中央の葉脈が固いもの）	◦ススキは運動場東南の土手など サトウキビは裏門沿いの畑
⑥ ふね 4	(1)  (2)  ※ビロウの葉柄は固いので、切る時には気をつける。	(1) ・ススキ、サトウキビ、ダンチクなどのイネ科の植物 ・ゲットウ（サンニン）の葉 ・ヤシ類の葉 (2) ・ビロウ(クバ)の葉柄	◦ゲットウは、玄関への通路のそばや運動場東南の土手 ◦ヤシは、正門周辺、幼稚園内の園舎の裏 ◦ビロウはプールの裏側
⑦ 風車 △3	 ※アダンの葉はトゲをとってから使う。	・アダンの葉 ・ススキの葉 ・ヤシ類の葉 ・ゲットウの葉 ・その他	◦アダンは、プールへの階段を上がった右側の方にある
⑧ ゴザ △3	 ◦大きな物を作る時は、葉を継ぎ足す。◦土手での草ゾリ	ススキ・サトウキビ・チガヤなどのイネ科植物 ヤシ類の葉	◦校地内やその周辺で採集ができる

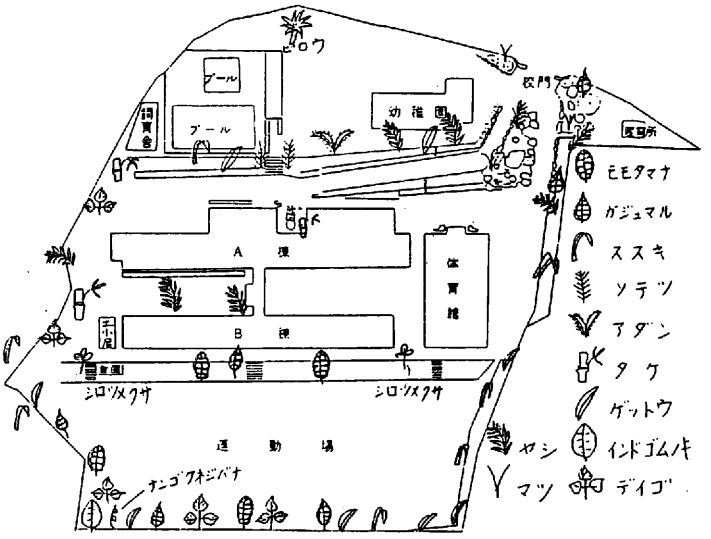
遊び名	作り方及び遊び方	材料名	場所
⑨ 虫カゴ △5		(1) マツの葉と固めの葉 (2) ソテツ(スーティーチャー)の葉	◦ソテツは、正門から入って正面と左側、プールの階段の左右にある
⑩ たこ	 ※4本の紐の合点と2本の竹ひごの合点が合うように糸を結ぶ。	モモタマナ(クワディーサー)ハマベブドウデイゴの葉などその他、いろんな木の葉が使える。	◦モモタマナは運動場周辺 ◦ハマベブドウは池のそば ◦デイゴは西側のへい沿いにもある
⑪ 草ゾリ 4・△3	 ◦自分や友だちを乗せてのソリ競争や土手すべり。	クロツグ(マーニ)の葉 ヤシ類の葉	◦クロツグ(マーニ)は浦添大公園内にある。 ◦ヤシは、西側のA棟とB棟の間。
⑫ てっぽう	 ※布を巻く箇所へ滑り止めとして傷をつけたりクギをつける。	竹 ※紙玉でっぽうの玉は紙の替わりにアカギの実も使える。	◦土小屋の向いのブロックべい沿い ◦浦添大公園内牧港川を渡ったところ
⑬ 竹トンボ △3	 ※バランスよく飛ばない時は、竹ひごの長さを調整する。	竹	◦学校内の他に校区内にも見うけられるので分けてもらうとよい。
⑭ スリッパ・帽子 △4		(1)はフクギの葉 (2)・(3)はインドゴムノキ・モモタマナ(クワディーサー)など大きめの葉	◦インドゴムノキは、運動場西側の奥の角にある。

遊び名	作り方及び遊び方	材料名	場所
⑮ ふえ	(1) (2) (3)  ○(1)・(3)は口にくわえ、(2)は、下唇に当てて息を吹き込む。	(1)ガジュマル等いろんな葉 (2)ソテツやモモタマナの実 (3)竹・ダンチク等筒になったもの	ガジュマル正門付近、運動場周辺 ダンチクは学校周辺

※ 当山小学校校内における植物の所在地

以上の遊びの他にもシロツメクサやムラサキカタバミを使った首かざりや冠、ガジュマルの葉をらせん状にくっつけて作る帽子など、植物を使った遊びは、数えきれないほど多種にわたる。

身の回りの植物をふんだんに使ってのびのびと活動させたいものである。



Ⅳ 生活科年間指導計画（第1学年）

1. 生活科単元構成の視点

生活科は、具体的な活動や体験を通して展開されるなかで、子ども自身が自分の生活に関心を持ち、たくましく生きていく力を養う学習であるといえる。

生活科の単元構成を行うときには、次のような視点にたって考えることが大切であろう。

(1) 学習の素材は、地域の社会や自然の特性をいかし、自分との関わりが具体的に把握でき、実際に活動をして体験が可能なもの、子どもの現実の生活に上で直面する興味・関心を生かすものであること。

(2) 社会と自然とを切り離して考えるのではなく、できるだけ一体的に取り扱うこと。

(3) 取り上げる具体的な活動や体験は、子どもが意欲を持って取り組めるもので、しかも、子どもに生活や学習に対する充実感を味わわせることができるもの。

(4) 子どもの活動が家庭・学校から地域へと広がり、活動が連続的に発展するようなものであること。

これらを基に第1学年の生活科単元配列を考えてみた。

2. 第1学年生活科単元計画（私案）

〔内容選択の視点〕
①健康で安全な生活
②公共の人々との接し方
③身近な物の消費と利用
④生活情報の伝達
⑤季節の変化
⑥身近なものの自然との触れ合いかかわり
⑦自分の生活との
⑧物の製作
⑨季節の成長
⑩基本的な生活習慣や生活技能

※ 下欄の番号は、内容選択の視点の番号を示している。

※ 内容選択の視点の⑩基本的な生活習慣や生活技能については、全単元を通して取り扱うように留意する。

学期	1学期				2学期				3学期		
月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
単元	(1)友だちつくろう	(2)がっこうたんけん		(3)公園へいこう	(4)家族を紹介しよう	(5)秋をさがそう		(6)さつまいもパーティー	(7)あそぶものをつくろう	(8)ともだちつくろう	(9)アルバムをつくろう
題材名	①あく手さくせん ②二年生と友だち	①さつまいもを育てよう ②学校たんけんをしよう ③遊び場さがし ④動物はなかよし ⑤まわりをたんけんしよう		①さつまいもを世話しよう ②公園へいこう ③菊を育てよう	①ぼくの家族です ②うちのしごと ③菊の世話をしよう	①公園をたんけんしよう ②虫はなかよし ③菊まつりをしよう		①さつまいもの世話をしよう ②さつまいもパーティー ③冬休みの準備をしよう	①昔遊びをしよう ②作ってみよう ③あそびはかせだぞ	①幼稚園生と友だち ③楽しい給食会	①大きくなったぼく・わたし ②遊びアルバムを作ろう
めざす子どもの姿	お兄さんお姉さんと仲よくする子 進んで友達を見つける子	さつまいもを大切に世話する子 興味を持って探険する子 安全に気をつけて遊ぶ子 小動物を大切にし、いたわりを持つ子 友だちと仲よく探険する子		草取りや水やりのできる子 のびのびと遊べる子 菊を大切に育てる子	自分の家族を紹介できる子 自分のできる事を見つける子 大切に育てようとする子	友達と仲よく探険する子 小動物を大切にいたわる子	行事に進んで参加しようとする子	大切に育てようとする子 友達と協力しながらパーティーをする子 楽しく冬休みを迎えようとする子	まわりの人と仲よく遊べる子 協力して作品を作る子 自分のものを他の人に紹介できる子	年少の子を気づかいながら遊ぶ子 みんなで楽しく食事のできる子	自分ができるようになったことを喜ぶ子 友達と楽しくアルバム作りをする子
内容選択の視点	② ① ②	⑥ ① ② ③ ⑤ ① ② ③ ⑤ ⑥ ⑥		⑥ ① ② ③ ④ ⑦ ⑧ ① ⑤ ⑥ ⑦ ⑧	⑤ ④ ⑨ ⑥	① ② ③ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑥	② ⑤ ⑥ ⑦	⑥ ② ⑤ ⑥ ⑦	① ① ② ⑥ ① ⑤	① ② ⑤ ⑥ ⑨ ② ⑤	⑧ ⑨ ⑧ ⑨

Ⅴ　授業実践

1. 単元名

「あそぶものをつくろう」

2. 単元の目標

身近な自然を使った昔遊びのよさや楽しさを見つけ、遊びやおもちゃ作りをしていく中で友達を気づかったり、教え合うことの大事さに気づく。また、身近な自然を使った遊びを考えようとする意欲を持つことができる。

3. 単元について

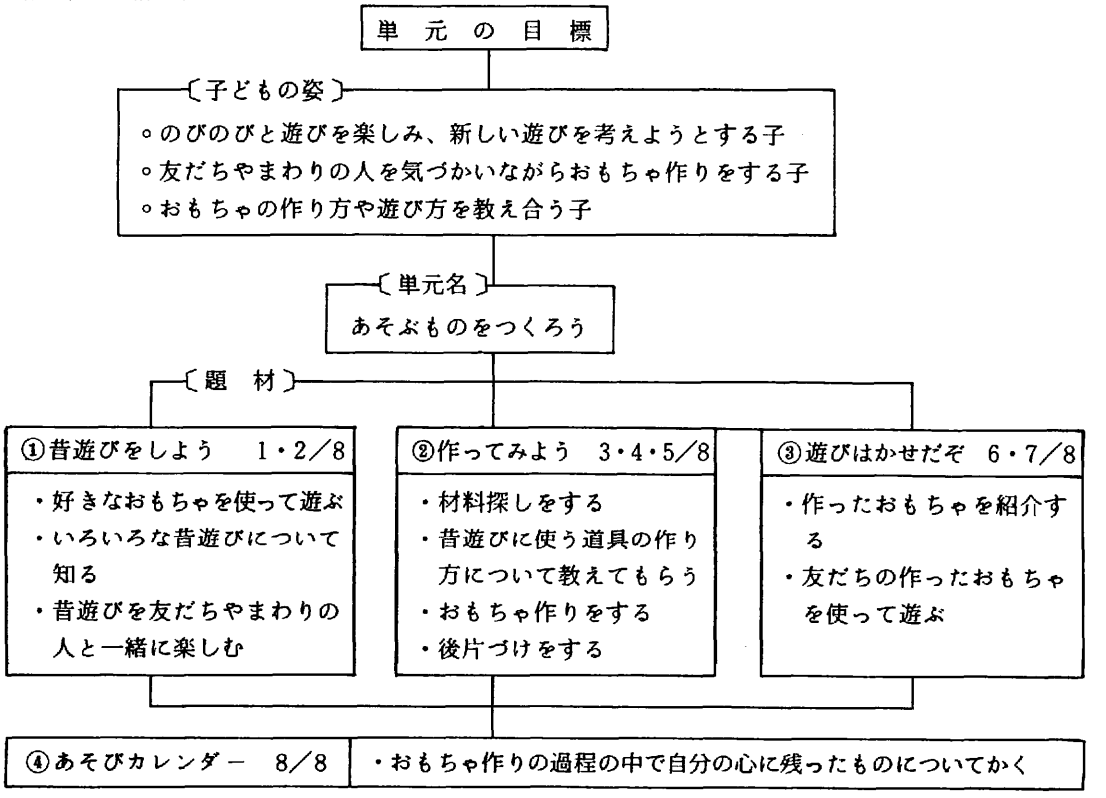
時間的な制約を受けた子どもたちの自然離れが問題にされる昨今、生活科の新設により自然に触れる活動や遊びが見直され、学習の中で展開されることになった。

子どもたちは、学校探険や公園探険などの活動を通して自然の中へ出て行き、彼らの経験の範囲内で思考錯誤をしながら製作活動を行ってきた。そして、その過程において自然の不思議さ、おもしろさを体感してきた。しかし、日常生活で自然の中へ出ていく機会が減ってきた子どもたちの自然や遊びに対する視野には限界があり、それを広げるのはなかなか難しいことである。

昔遊びは、自然に恵まれた時代の子どもたちが自然をふんだんに使い、自然の事象を自分の知識としながら作り出してきたものである。

そこで、昔遊びを知り、遊ぶことは、子どもの自然に対する視野を広げ、自分のおもちゃを作ることで自然をより身近に感じ、積極的に働きかける態度を培う手助けとなりうるものである。

4. 単元の構造図



Ⅴ　授業実践

1. 単元名

[illegible]

2. 作品の紹介

[illegible]

3. 単元について

[illegible]

4. 単元の構想図

[illegible]
[illegible]
[illegible]

5. 単元活動計画

題材名	題材目標	内容構成	時間	おもな活動と内容例	援助並びに留意点	評価の観点（評価の方法）	関連準備
①むかしあそびをしよう	・昔遊びを知ろうという意欲を持つことができる。 ・いろんな昔遊びがあることを知る。 ・友だちと仲良く昔遊びができる。	②身近な人との接し方 ⑥身近な自然との触れ合い	1 1	・好きな遊びをする。 ・昔遊びについて聞いたこと、調べたことを発表する。 ・昔遊びの話を聞く。 ・昔遊びをする。	・遊ぶ場所や安全を考えさせ、自分の好きな遊びの道具を用意させる。 ・教えてくれる方への礼儀を考えさせる。（あいさつ・聞き方） ・簡単なものは、1・2人に作らせる。 ・実際に道具を使って数人に遊んでもらう。 ・おもちゃは実際使っている物を持ってくる。	・安全に気をつけて遊べたか。（観察） ・どんな遊びがあって、どんなものを使ってあったか。（発表・質問紙）	・好きな遊び道具 ・昔遊びの道具 ・マスコット
②つくってみよう	・作りたいものの材料を探すことができる。 ・自分が作ってみたいおもちゃをお年寄りや友達と協力して作ることができる。 ・おもちゃ作りの手順がわかる。 ・安全に気を付けて道具を使うことができる。 ・協力して後かたづけができる。	⑥身近な自然との触れ合い ②身近な人との接し方 ⑧物の製作	1 2	・グループに分かれおもちゃ作りに必要なものについて話し合う。 ・材料探しをする。（見つけた材料には、印をつける） ・おもちゃの作り方を教えてもらう。 ・おもちゃ作りをする。 ・後片付けをする。	・子どもから質問やお願いがあったときに助言してもらうようにする。 ・材料のあった場所を地図に記入させる。 ・1つのコーナーに責任者として数人のお年寄りをお願いしておく。 ・必要な道具は、前日に子どもたちとそろえておく。 ・すぐに採集できるものは不足しだい採集させ、近くで採集できないものは補充用として教師が準備しておく。 ・後片づけは、自分のまわりだけでなく協力して全体を片づけさせるようにする。	・作り方がわかったか。（質問紙・観察） ・友だちやお年寄りと協力して作ることができたか。（観察・作品） ・けがをしないように安全に気をつけて道具が使えたか。（観察） ・後片づけは、協力してできたか。（質問紙・観察） ・気持ちよく作品が作れたか。（質問紙）	・校内地図 ・ノコギリ・カッター・切り出しなど製作用の道具 ・補充用の材料
③あそびはかせだぞ	・自分で作ったおもちゃを友達にわかりやすいように説明できる。 ・昔遊びの良さに気づく ・身近な自然を使って新しいおもちゃを作りたいという意欲を持つ。	⑤情報の伝達	2	・自分で作ったおもちゃを友達に紹介する。（作り方・遊び方の説明） ・友達の作ったおもちゃを使って遊ぶ。 ・友だちの作品の良いところを話し合う。 ・昔遊びの良さや楽しさについて話し合う。	・発表は、個人でもグループ単位でもよい。 ・発表は、言葉だけではなく劇化や紙しばいなど工夫してするように助言を与える。 ・教師も遊び道具を作り、遊ばせるときには補充用として数個加えて使わせる。 ・修理ができるようにカッターなどの道具類も準備させておく。	・聞く人にわかりやすいように発表を工夫できたか。（観察・発表・作品） ・おもちゃを大切に使い、仲よく遊ぶことができたか。（観察・質問紙） ・どんなおもちゃを作ってみたいか。（発表・質問紙）	・OHP ・ノコギリ・カッターなどの製作用道具 ・手作りのおもちゃ
④あそびカレンダー	・自分が作ったおもちゃ遊んだ様子がわかるように工夫してかくことができる。	⑤情報の伝達	1	・自分で作ったおもちゃや遊んだ様子をかく。	・授業以外に家でも作ったものがあればかかせる。 ・1年間の遊びアルバムの作製に使うので大切に保管しておく。	・ようすがわかるように工夫してかくことができたか。（観察・作品）	・OHPのシート ・画用紙 ・両面テープ

6. 活動計画案

(1) 題材名　むかしあそびをしよう（2／8）

(2) 本時のめあて

・いろんな昔遊びがあることを知る。

・昔遊びの良さに気づき、その楽しさを味わう。

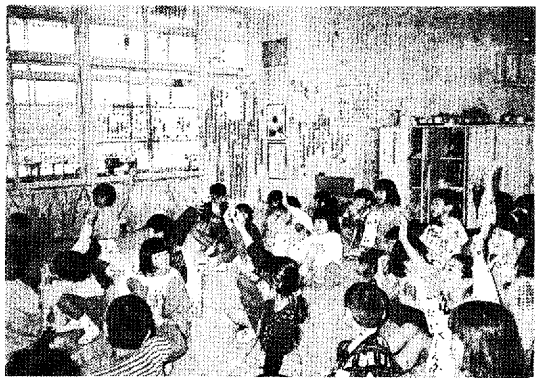
(3) 展開

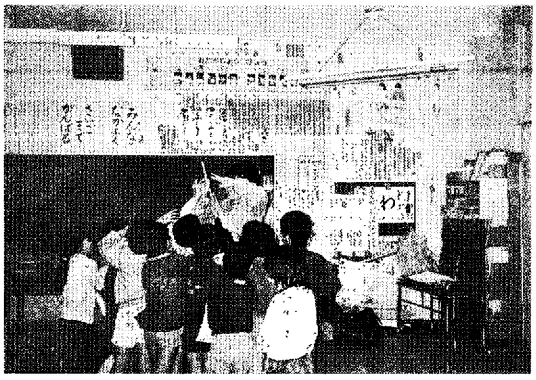
時間	子どもの姿	活動内容	援助及び留意点	備考
5		1　昔遊びについて調べたことややってみた遊びについて発表する	・調べてきた子は、すべて発表させる ・前時に教えてもらった遊びをやってみて楽しかったことなどを思いださせる	
8		2　昔遊びを教えてもらう ・提示された遊び道具を見ながら聞く	・教えてくれる人への礼儀を考えさせる あいさつ 聞き方 ・遊び方を予想させどの遊び方も賞賛する	ソテツの葉 デイゴの葉 竹 ゲットウの葉 どんぐり
25	ひとつの遊びに夢中になったり、いろんな遊びに挑戦して仲良く遊ぶ 自分の遊んだものをかたづけ、友達のものも手伝う	3　昔遊びをする 4　後かたづけをする	・子どもによって活動の仕方は違っても、その子なりの取り組みを認めてやる ・手分けをして後かたづけをさせる（自分のまわりだけでなく協力して全体を片づけさせるようにさせる。）	遊び道具 水路 ビニールプール 新聞紙 バケツ ビニール・セロハン・ガムテープ
7	自分の思うことを友だちに聞かせる	5　昔遊びをしてわかったことを話し合う	・今の遊びとの違いに目を向けさせ、昔遊びの持つ良さに気づかせる ・自分が楽しかった遊びも発表させる。	

7. 授業のメモ

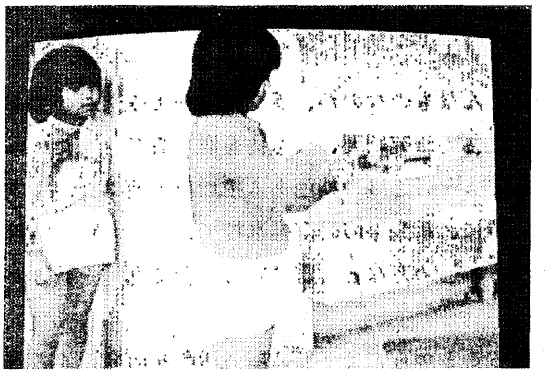
(1) 題材名　むかしあそびをしよう（1／8）

題材	活動内容	留意事項	授業メモ
むかしあそびをしよう	・好きなもので好きな遊びをする。 ・教師の小さい頃の遊びの話を聞く。 ・葉っぱの舟 ・たけとんぼ ・紙玉でっぽう　他	・遊ぶ場所や安全を考えさせて、自分の好きな遊び道具を用意させる ・簡単なものは実際に作らせてみる。 ・数人を出して教師の小さい頃の遊びを試してもらう。	・遊びとしてはミニ四ク、ボールゲーム、人形ごっこが多い。 ・一人だけで遊ぶ子が多く、友達と交換しながら遊ぶ子は少ない ・アダンの葉で作ったハブグァーが指から離れないことに不思議がり、友達とともに、離そうと必死になる子がいた。 ・草木を使った簡単なおもちゃにもかかわらず、子どもたちの関心の高さには驚く。

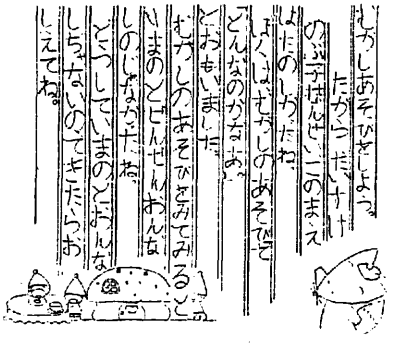




(2) 題材名　むかしあそびをしよう（2／8）

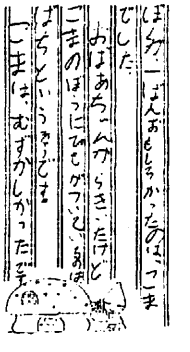
題材	活動内容	留意事項	授業メモ
むかしあそびをしよう	・昔遊びについて聞いてきたことを発表する。 ・昔遊びについて教えてもらう。 ソテツの虫かご たけとんぼ 紙玉、水でっぽう 草ぞり 木の葉凧 竹笛 お手玉　他 コールマー（こま） 	・教えてくれる人への礼儀を考えさせる。 （挨拶、聞き方） ・子どもによって活動の仕方が違ってもその子なりの取り組みを認めてあげる。 ・自分のまわりだけでなく、協力して全体を片付させるようにする。	・紹介してもらった遊び方の他にも自分なりの遊び方を考えた子がいた。 ・まわりの大人にも聞きながら昔遊びに挑戦している子もいた。 ・難しい遊び（コールマー＝こままわし）をやってのけた友達のことを励まし、賞賛してあげる子どもの姿があった。 ・遊んだ後はほぼ全員が片付けに参加した。 ・少ない道具を交代で使おうとせず、遊ぶ道具がないといっては見ているだけの子もいた。 ・壊れた遊び道具をその場で修理したり、一緒に遊んでくれる人の必要感を痛感した。

資料1



資料2

資料3



8. 結果と反省

本題材では、子どもたちが遊んだ経験の少ないものを素材として取り上げてみた。

身近な木の葉一枚、茎一本を使ってできた物が飛行機のように飛んだり、笛のように音を出したりすることに対して子どもたちは驚きの声をあげ、それらを使って楽しく遊ぶ姿がみうけられた。

この簡単な仕組みで、しかも手に入りやすい素材が子どもたちに受け入れられたことで、「あそぶものをつくろう」の単元の展開を通して「子どもの目を身近な自然へと向けさせることができる」という期待感を持つことができた。

一方、本時の授業では、教師一人が昔遊びの紹介をしてしまったが、できることなら「生活科」のねらう身近な人々との触れ合いという面からも考えて、地域のお年寄りに協力してもらう方法もよいのではないかと思う。

また、活動計画の中で、遊びを体験してからおもちゃの製作に取り掛かるという方法を試みたが、児童の実態から考えて「話を聞く」→「おもちゃ製作」→「遊ぶ」という流れの方がより活発な活動ができるのではないかと考えられる。

「あそぶものをつくろう」の単元を展開する前の準備段階として、4月からの活動の中に身近な植物に触れる機会を多くもたせ、1年間のまとめとしてこの単元を位置づけることが望ましいように思われる。

Ⅵ 研究の成果と今後の課題

入所後もしばらくは生活科というものがどんなものなのか、雲をつかむような思いであった。

しかし、資料収集のため「生活科」についての研究紀要、出版物を取り寄せ、また、県内、県外の「生活科」研究推進校の研究会にも参加し、その地域の特色ある生活科の授業を参観することで生活科のイメージをつかむことができた。特に、新潟県の研究推進校である大手町小学校では、研究主任の先生から実践に裏付けされた生活科の進め方など、質疑応答の形で助言を戴き、生活科という教科の概要をつかむことができた。

生活科の登場で屋外の観察活動が多くなることから、子どもの屋外活動を活発にする方法として学習に取り入れられる遊びの研究、特に今回は、身近な植物を使った遊びについて研究してきた。遊びのもつ意義や重要性、多種多様な遊びについて知り、遊び道具の材料を探し検討していく中で、いままで目にも止めなかったような小さなものにも関心をもつようになり、「野外観察は楽しい」という気持ちが従来以上に強くなり、子どもたちを積極的に屋外へ出してあげられるような気になってきたことは、今後、生活科を進めるにあたって大きな成果だと思う。

今回の研究では、成果よりも課題の方が多く残された。

① 地域や子どもの実態により即した年間指導計画の作成と実践

② 生活科の評価をどのような方法でおこなうか。

③ 身近な素材を使った遊びの継続研究

④ 地域の人々との交流を深めるためにはどのようにしたらよいか。

⑤ 地域の素材として「さとうきび」を長期栽培活動に持っていくためにはどうするか。

しかし、これから自分の研究しなければならない課題が多く見つかったということは、研究意欲を駆り立てたという点から考えて、今回の研究の成果といえないだろうか。

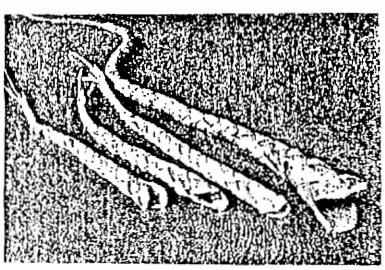
生活科の実施にともない、子どもたちが積極的に作り上げていく授業、そして、たくましく生きる子どもを育てるための授業を目指して、これからもより一層研究を深め実践していきたい。

おわりに

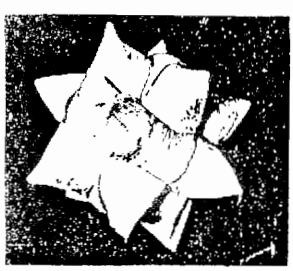
研究の機会を与えて下さいました浦添市教育委員会、六カ月にわたり温かく励まして下さいました西里所長、大城主査、仲西勉指導主事ならびに各指導主事や研究所職員の皆様方、宮城先生をはじめ当山小学校1年の先生方、外原淳氏に対して心より深く感謝申し上げます。

《主な参考文献》

大野連太郎	『生活科シリーズ』1、2、3	中教出版	1988
梶田　叡一	『生活科の構想と実践』	第一法規	1988
秋山　和夫	『生活科へのアプローチ』	東京書籍	1988
上越市立	『生活する力を育てる教育』	教育新聞社	1987
大手町小学校	(続・雪の町からこんにちは〔教師編〕)		
永山　絹枝	『おきなわ伝承こどものあそび』	新星図書	1982
かこさとし	『子どもと遊び』	大月書店	1986
外原　　淳	『おきなわの工作』	沖縄文化社	1987
高野　尚好	「教育ジャーナル」	学習研究社	1988
	(生活科とはこんな教科です)		
日本教育新聞	「生活科を創る」	教育新聞社	1988

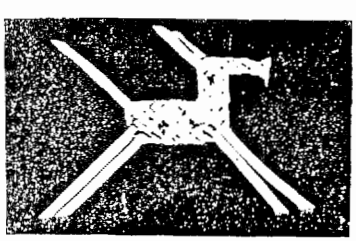


ハブグァー



星コロ

カエル



馬グァー

(外原淳著「おきなわの工作」より)